

実習校の状況

1年生 2クラス(1クラス44名) 担任1名 副担任2名 プレイルーム学習者が1クラスに5名以上

・事前打ち合わせで伺っていた通り、学年全体が活発で、休み時間も他クラスを行き来して話したり、中庭で集まったり、テニスコートで遊んだり、1日中活気で溢れていた。そのため授業中の発言も多く、発問すると、返答する生徒が多く見られ、疑問や質問があるとその場で確認することができる。一方で、切り替えが上手くできず、授業中も私語が多かったり、立ち歩きをしたりなど、指示をうまく聞くことができない・集中が長く続かない生徒も多く見られた。入学してあまり時間が経っていないためか、集団的意識があまりなく、暴言や暴力などの問題行動が毎日のように見られ、個人主義の生徒が多く見られた。そのため1人1台 ICT教材が準備されているが、このような状況では授業中に正しくICTを活用することができないと学校側で判断し、一度も使用されていない。グループワークは、切り替えの難しさや集中力が長く続かないという点から、クラス全体で行った事がなく、少人数クラスでしか行った事がない。

良かったこと、自分課題、気づき

・授業面では、大きく時間が余ったり、時間が足りなかったりする事なく、時間配分がうまくできた。ある程度余裕を持って、1回の授業の目標を決めておいたので、発問に対して生徒が難しそうにしていたら全体の様子を見ながら時間を取ることもできた。それぞれの学習理解度に合わせた授業展開をする事が目標だったので、早く課題ができた生徒には追加の課題も提示したりした。元々の教材が難しい部分があったので、もう少し身近な例文や身近な課題などでわかりやすくてきたらよりよかったと思う。

・今まで少人数でしかグループワークをした事がなかった学年で、最後の授業にクラス全体でグループワークを試みた。「意見と根拠」という題材で「自分は子どもがいいか・大人がいいか」というテーマで自分の根拠を書き、班で発表した後、代表者はクラス全体の前で発表するという内容である。ひとりひとりの意見と根拠を書いたプリントを回収し、添削やコメントを書いたことで、それぞれが自信を持って自分の意見を伝えやすくなっていたと感じた。そして発表を静かに聞くということは難しかったが、自分の意見と同じなら喜んだり、反対の意見なら根拠に反論したりなど、積極的に全員が参加してくれていた。実際に授業をしてみて、自分の意見を誰かに伝えるグループワークができる学年だと感じた。課題としては、相手の話を最後まで静かに聞くことであつたため、聞く時間とは別に反論の時間を作る方がこの学年は静かに相手の話を聞き、また全員が話し合いにもより深く参加できるのではないかと考えた。

・あまり集中力が続かず私語をしてしまったり、立ち歩いてしまったりする生徒に対して、「今話するのやめよう。」「席に戻ろう。」とただ注意するのではなく、「みんな早く帰りたいでしょ?早く座って話聞こう」「さすが班長、しっかり切り替えてできるよね?」と生徒の興味・関心を惹くような話しかけをするように心がけたことによって、指示を素直に聞く事ができる姿をよく見る事ができるようになった。そして生徒が指示を聞き行動できた時には、褒めたり認めたりすることで、生徒の自信につながり、思っていた以上の力を発揮する事もあった。それぞれの生徒の好きなことや性格をできるだけ理解して関わること、普段から小さな「できた」に声をかけることの大切さを感じた。

・実習期間中に様々なフィールドワークや講座に参加させてもらい、教師としての学びの場を体験した。例えば、人権教育を行う中で、地域の人権問題や歴史に直接触れる事ができる地域だったので、中学だけでなく地域の小

学校・地域の方とも連携し、それぞれの学校の取り組みや学習状況などを話し合い、これからの人権教育について考える時間があつた。地域全体で連携し、教師の学ぶ機会を作ることの大切さを感じた。

・私が見学させて頂いていた部活動の公式試合に、3年生の修学旅行が重なってしまい、顧問の先生3名と3年生が参加できず、代わりの先生で引率、2年生での参加が決定したが、専門的知識を持っている先生がおらず、私が引率に「コーチ」として参加させて頂いた。教育実習ではあまり経験できない試合の引率という機会、部活動で生徒と深く関わる事ができ、普段の放課後の部活動の監督という立場だけでなく、教師側としてしなければいけない仕事にたくさん触れる事ができて、すごく良い経験だった。授業を見ているだけでは見られない生徒の姿が見られた事が、部活動の顧問の良い点だと感じた。

・元気あふれる学年で実習をする中で、私自身が「口に含んだ水を服にかけられる」「腕を殴られる」などの問題行動に何度も遭遇した。実習生なので我慢するべきだと最初は感じていたが、「この人なら大丈夫」という感覚を持たせてしまうことが、1番危険であると学んだ。1人の我慢が学級崩壊につながる危険性もあるので、「誰に対しても人を傷つける行為はしてはいけない」と生徒に理解してもらえるように、少しの問題行動もしっかりと取り上げ、生徒指導をするということの大切さを感じた。自分を通して、実習中にそのような経験をして、対処をするという場面はなかなかないと思うので、これからの教育の場で生かしていきたい。

・生徒の様々な問題行動(暴力行為、授業の妨害行為など)に触れる中で、問題行動の裏には生徒それぞれのしんどさや悩みがあると身をもって感じた。うまく言葉にできない、うまく消化できないという葛藤が問題行動として現れてしまう場面がたくさんあつた。生徒への伝え方次第で、生徒の態度は180度変わる。「あの先生はわかってくれる」「あの先生は私が悪くないのに怒ってくる」教師が生徒への理解を示しているかは、生徒が1番感じ取っているのだと生徒と接して思った。伝えたいことは生徒に理解を示した伝え方で伝え続けることが大切であり、少しの変化でも「生徒には伝わっていた」と感じられる場面を生徒の言動から見つけることが、生徒と教師の良好な信頼関係を築く中で、何よりも大切なことだと感じた。